

野 暉 穎
間 峻 原
光 康 退
辰 隆 藏
編

定本西鶴全集

第十卷

中央公論社版

編者

額原退藏

昭和三十四年一月十日 初版

暉峻康隆

昭和四十八年二月二十四日 六版

野間光辰

發行者

山越豐

印刷者

小泉松三郎

印刷所

東京都文京區白山二丁目十三
新陽印刷有限公司

發行所

東京都文京區白山二丁目十三
中央公論社

定本西鶴全集第十卷
定價金參千五百圓

東京都中央區京橋二ノ一
振替口座東京三四番

電話(561)五九二一番(代)

目次

凡例 三

解説 五

生玉萬句 二五

哥仙
大俳諧師坂 六七

俳諧獨吟一日千句 一〇七

古今俳諧師手鑑 一八九

西鶴俳諧大句數 一二三

俳諧 虎溪の橋 二八七

俳諧 物種集 新付合 三一三

凡 例

一、第一卷以下第九卷に至る小説篇の後を承けて、第十卷以下第十三卷に至る四卷には、西鶴の俳諧の作品を網羅収録した。

一、その内、新しく編者に於て編纂した連句集・附句集・句評集を収めた第十三卷以外は、西鶴自身の撰著にかかるものを主として収め、これをその刊行もしくは成立の年代の順序に従つて排列した。

一、本卷はその俳諧篇最初の第十卷に相當する。随つて本卷には、西鶴の處女撰著たる『生玉萬句』を初めとして、以下『俳諧物種集』に至る七部の西鶴自撰の俳書を、その刊行の順に従つて収録した。

一、本卷所收本の底本は、『西鶴俳諧大句數』を除く他の六部は、いづれも天理圖書館の藏本に據つた。『西鶴俳諧大句數』は松宇文庫の藏本に據つたが、今その所在を明かにしない。

一、活字化に際しての用意は、小説篇の凡例に記したところと少しも變りはない。即ち活字印刷の技術の可能な範圍に於て、原本を忠實に翻刻することを原則とする。但し『古今誹諧師手鑑』は各俳

人の自筆短冊を摸刻したものであるが、これを全部凸版にして收めることは本全集の性質上如何かと考へたので、すべて活字を以て翻刻することにした。もし原本の倂を知りたいと希望せられる場合には、伊藤松宇氏の覆製本について見られたい。又『俳諧物種集』の表紙見返しの「大坂町中俳諧月次日」の一覽表は、通覽の便宜を慮つて、巻頭の一處に纏めて掲載することにした。

一、原本の丁數は、これを各丁の終りに括弧によつて示した。(一)は即ち一丁表、(二)は即ち一丁裏の意である。

一、原本の表紙、自筆の序・跋、其他參考に資すべきものを口繪として收めた。

一、頭註は紙幅のゆるす範圍に於て校訂上の註記を主とし、其他は通讀して付心を知る手がかりの程度に簡単な語註を施した。

一、本卷所收各篇の校訂・頭註並に解説は、野間光辰がこれを擔當した。

解 說

野 間 光 辰

生玉萬句いくたままんく

横本一冊、大阪阿波座堀板本安兵衛開板。紺表紙左肩に題簽剝落の痕跡があるが、内題なく、柱刻にも書名推定の手がかりとなるべき文字を存してゐない。これを「生玉萬句」と名づけたのは、大阪生玉の神前に於ける興行に因んだもので、紹介者の故頼原退藏博士の命名である。序文に「十二日にしてこと畢れり」とあり、萬句の最後に「實文十三丑癸林鐘廿八日」と見えてゐる。即ちこの萬句が、寛文十三年六月十七日から二十八日まで、前後十二日間に互つて興行せられたことを知る。しかし奥附には刊年の記載を闕いてゐるから、本書の刊行年月は判らない。刊年の記載を闕いてゐるといふことは、それが萬句成就の寛文十三年六月二十八日から間もなく刊行せられたからだと考へてよいであらう。

本書は現在天理圖書館わたや文庫の所藏であるが、もと神戸川西和露氏の和露文庫の收藏にかかり、頼原博士が同文庫の書目解説を執筆中これを發見して、西鶴の處女撰集として學界に紹介せられたのが世に

知られた最初である（雜誌「ひむろ」昭和二年一月號所載「和露文庫俳書目」。其後にも「西鶴初期の俳諧」（雜誌「同人」昭和二年一月・三月號所載）・「西鶴の俳歴」（雜誌「國語國文の研究」昭和三年三・四月號所載、「俳諧史の研究」所收）等の論考に於て、博士は屢々本書の價值と意義に言及し、昭和十七年七月には複製單行して汎く研究者に頒たれたのであつた（靖文社版「生玉萬句」）。最初に發見紹介せられた時から算へると既に二十五年の歲月が經過してゐるが、爾來今日に至る迄舊和露文庫藏本以外に他に傳本の發見せられたことを聞かない。随つて本書の正しい題號は未だに不明のままで、本全集に收めるについても暫く頼原博士の命名を踏襲するより外はなかつた次第である。

本書が西鶴自撰の俳書の最初であることは、前掲の頼原博士の論考並に解説に盡されてゐる。それには西鶴自筆の板下であるといふこともさうであるが、何よりも有力な根據は萬句追加の一卷である。

追加

咲花や懷紙合て四百本 井原 鶴永

水引壹把青柳の糸 南 方由

春風をおさむるへきに鬘斗添て 西山 西翁

いつたい追加の一卷は、本興行の連衆に洩れた人々を網羅して行はれるのであるが、其場合興行満座の祝意を籠めて、催主の發句に對して、催主と最も關係の深い師友先輩もしくは後援者等が、年・齡・地位・

俳歴等に應じてそれぞれ脇・第三以下を勤めるならはしであつた。だから追加の發句を鶴永即ち後の西鶴が詠じ、西鶴の師の西山宗因が第三を附合つてゐるといふことは、明かに西鶴がこの萬句興行の主催者であることを物語つてゐるもので、本書はつまりその萬句の各卷と追加の第三迄を收め、猶それ以後に催された祝賀興行の五十三卷の發句のみを集めて附録としたものである。萬句追加の奥に執筆として「青木藤兵衛友淨」・「伊藤長右衛門道清」兩人の名が見えてゐるが、この兩人は萬句興行の際の執筆役であつて、本書の板下は紛れもない西鶴の自筆である。本書が西鶴自撰の俳書の最初であるといふ、頼原博士の説は、今日に於てもそのまま首肯せられなければならない。

さういへば序文の終に「そしらば誹れわんざくれ、雀の千こゑ鶴の一聲と、みづから筆をとつてかくばかり」といつてゐるのも、いかにも西鶴らしい筆致だと考へられる。この序文によると、當時の大阪俳壇には新舊二派の對立があり、宗因を中心とする革新派の連衆は守舊派から「文盲」と罵られ、その「世の風俗しを放れたる俳諧」は世人から「阿蘭陀流」などときみせられて、大阪の俳諧師を網羅して行はれた萬句俳諧にも加へられなかつたといふことが判る。これに對して西鶴は宗因門下の一人として、宗因流俳諧の自由清新な輕口狂句の特質を誇示すべく、生玉の神前に數奇の輩を集めて「一流の萬句」を催し、彼等を敵視排斥して行はれたさきの萬句興行が失敗に終つたのに反して、見事十二日間に満座成就して凱歌を奏したのである。「阿蘭陀流」の名稱は、後年西鶴みづからこれを標榜し、「俳諧胴ほね」(延寶六年戊・

「三鐵輪」(同六年刊)等に於て、その即吟即興の自由と奔放を誇つてゐるのであるが、實はそれは最初、宗因俳諧に加へられた嘲笑的な異名であつたのであり、この一事によつても宗因とその一派の新しい俳諧が、當時既に大阪に於ける貞門保守の一派と對立して、鬱然たる勢力を有する一大敵國をなしてゐたことが知られるのはまことに興味が深い。

かうして本書は、談林俳諧史の劈頭を飾る極めて重要な撰集であつたが、同時に又それは、西鶴個人の俳歴の上からいつて、極めて意義深い撰集であつた。といふのは明暦二年十五歳にして「俳諧正風初道に入り」(「大矢數」自跋)、寛文二年二十一歳にして早くも點者として自立した西鶴ではあつたが(「石車」卷四)、本書以前に於ける收穫としては、長愛子撰「遠近集」(寛文六年刊)・以仙撰「落花集」(寛文十一年刊)・風虎撰「櫻川」(寛文十二年刊)等二三の俳書に、僅かに發句數句を入集してゐるくらゐのもので、俳諧師としては未だ取立てていふべきほどの存在では決してなかつた。しかるに突如——眞に突如として、この「生玉萬句」に於て、大阪俳壇を二分する一派の中心人物として英姿をあらはして來るのである。そしてそこに示された輝かしい成功は、後年の談林の驍將としての目覺ましい活躍を既に豫想せしめるものがある。其意味に於て本書は、單に西鶴自撰の俳書の最初であるといふばかりでなく、西鶴の俳壇的進出を記念し、その成長と發展を跡づける重要な資料であるといはなければならない。

哥か 仙せん 大だい 俳諧師はいかいし 坂

大本一冊、紺表紙中央の題簽に「哥か 仙せん 大だい 俳諧師はいかいし 坂」とある外、内題なく、柱刻にも書名の表示を闕いてゐる。從來僅かに存する本書の傳本はいづれも原題簽を佚してゐたので、先年稀書複製會がこれを複製する際にも、尾崎久彌氏の説に従つて、假りに「大坂俳歌仙」と名づけたのであつたが、其後原題簽を具備する大阪滋岡家舊藏本の發見によつて、正確な書名が明かになつた。しかし卷首に「延寶元年歲次癸丑冬陽月中澣」の序文があるだけで、卷末の奥附を闕いてゐる。随つて刊行年月と板元書肆名を猶詳かにし得ないのは残念である。

本書は大阪の俳諧師三十六人を撰んで、これが肖像を掲げ、且その上に各作者の發句を題したもので、同種のものとしては、本書以前に高瀬梅盛撰の「俳仙卅六人」(萬治三年刊)があり、又以後に於ても紙谷如扶撰「俳こ三ヶ津さんかつ 繪え入いり」(天和二年刊)が西鶴の挿繪で公にせられてゐるが、いづれも三十六人の作者を揃へただけで、内容は純然たる繪發句集であり、歌仙繪の形式に倣つて眞に「哥仙」の名にふさはしい内容を有するものとしては、實に本書が最初のものである。本文並に挿繪は西鶴の自畫自筆と認められる。そして同じ西鶴の撰に成る「古今俳諧師手鑑」(延寶四年刊)や「俳諧百人一句難波色紙」(天和二年刊)とは、

題句の選擇や肖像の構圖に於て、屢々一致もしくは類似の跡を示してゐるものが多い。試みにこれを表示すれば、次の如くである。

空	存	句、「手鑑」所出。
立	以	像、「色紙」ほぼ同圖。
秋	月	句、「手鑑」所出。
方	女	「色紙」同句同圖。
遠	舟	像、「色紙」同圖。
一	得	像、「色紙」やや異なる。
久	任	句、「手鑑」所出、像、「色紙」と同圖。
不	琢	像、「色紙」同圖。
醉	鶯	像、「色紙」ほぼ同圖。
由	平	像、「色紙」ほぼ同圖。
素	玄	句、「手鑑」・「色紙」同句。像、「色紙」やや異なる。
忠	由	句、「手鑑」所出。
貞	因	像、「色紙」同圖。
松	意	像、「色紙」同圖。
路	春	像、「色紙」ほぼ同圖。

宗久 句、「手鑑」所出。

以仙 像、「色紙」は俗體なれどほぼ同圖。

如貞 像、「色紙」ほぼ同圖。

清勝 像、「色紙」同圖。

行風 句、「手鑑」所出。像、「色紙」同圖。

道寸 像、「色紙」ほぼ同圖。

もつとも瀧田貞治氏のやうに、「難波色紙」と構圖を同じくするものが多いといふことを以て、本書の西鶴自畫自筆なることを疑はうとする見解もあるが（『西鶴の書誌學的研究』第三篇「西鶴原本の書誌的記述」、それは寧ろ逆であつて、かうした事實の存することは、とりもなほさず本書が西鶴の自撰に成ることを證明するものであるといはなければならない。そして頼原博士が既に指摘せられたところであるが（『江戸文藝論考』所收「西鶴著作考」、涼花堂斧磨作「當世誰が身の上」（寶永七年刊）卷二「名は末代の歌仙女」の章に、

今はむかし、難波津西鶴入道の撰集とて、大阪哥仙といふ者見侍れば、西山梅翁の門葉三十六人の俳諧なり。と見えてゐるのは、本書を西鶴の撰著とする最も有力な傍證である。

ところで西鶴が本書一部を撰んで世に公にするに至つた趣旨は、卷頭の序文がこれを明かにするところである。しかしそこに「達干俳諧之歌人を選て畫圖にちりはめ、見ぬよの友とせんはかり」といつてゐる

のは、此種の序文に屢々見受けられる常套的な表現であつて、もとより西鶴の眞意をあらはしたものである。それよりも序文の眼目をなすものは、次の一節にある。

されとも誹佗立我諍事、恰如有牙大(犬)有瓜(爪)鶏而分かたし、誠や衆愚愕(愕)々たるは一賢之唯々たるにはしかしと、或老翁に尋搜て云々。

ここに「或老翁」とは、いふまでもなく西鶴の師宗因である。そして「衆愚」とは、宗因と宗因の流を汲む西鶴等一派の人々を敵視し嘲笑して已まない貞門保守派の連衆のことである。さきに「生玉萬句」興行の経緯について見られたやうに、西鶴はこれら保守派の執拗な論難攻撃に最後のとどめを刺し、以て衆愚の蒙を啓かんがために本書を著したのである。其意味に於て本書は、「生玉萬句」に次いで著された、宗因流俳諧の宣傳弘布の書として重要な意義持つものなのである。

既にしてさうした動機と意圖の下に著された本書である。随つてそこに選ばれた三十六人の俳諧師の顔觸がいかなるものであつたか、改めていふまでもないであらう。勿論それらの中には、明かに宗因の先輩であり、又宗因の門人といふよりも宗因の友人同輩と呼ぶ方がふさはしい人々も多數交つてゐる。だから涼花堂斧磨のいふやうに、これを悉く「西山梅翁の門葉」と見るのは、やや正鵠を失するものといはなければならぬ。事實三十六人の俳士をその師承傳系によつて分類すれば、明かに宗因門と認められるもの十三に對して、貞徳門三、重頼門四、立圃門三、貞室門三、季吟門二、令徳門二、其他師承不明五といふ

數字があらはれて來るのである。けれどもたとへば空存や玖也や、久任・忠由・宗久・宗信・重安等の如きは、夙くから連歌を通じて宗因と師弟交友の間柄にあり、俳諧に於ても師承を異にするとはいへ、宗因の主張に共鳴しその俳風の影響感化を受けた人々であつたのである。それ以外にここに選ばれた貞門出身の人々も、猶仔細に調査すれば、多かれ少かれ宗因俳諧の共鳴者であり同調者であつたといふことが出来るであらう。本書は實にさうした共鳴者や同調者をも網羅して、宗因流の陣容を誇示した書物なのである。

歌仙繪の排列が、いかなる順序・約束の下になされたものであるか、未だその詳細を究め得ないであるが、巻頭・巻軸に先づ古老・先輩を据ゑ、以下順次兩端から奥に向つて、その年配や經歷・身分等に應じて排列するのが、最も普通に考へられる方法であらう。ところで撰者の西鶴その人は、第四番の右座に、左座の正甫と相對して位置してゐる。その俳歴からいつても宗因入門の時期からいつても、恐らく集中の誰よりも末輩であつたと思はれる西鶴が比較的上座にあるといふことは、それが彼自身の撰著であるといふことを考慮に容れるとしても、輕々に看過することの出来ない事實である。即ちこの一事を以てしても、西鶴が當年の宗因門下に於て占めてゐた地位聲望の程が窺はれるといふものである。時に西鶴三十二歳、未だ有髮俗體の姿で、小袖の上に黒の長羽織を着し、左膝を立てて扇子を斜に構へてゐる。揚れる眉鋭い眼は、自ら精悍の氣を漲らせてゐる。上に題した「長持に春そくれ行更衣」の一句は、さきに以仙撰

「落花集」(寛文十一年刊)に入集したところで、西鶴初期の作風を代表する得意の句である。因みにまだこの時には、西鶴は前號の鶴永を稱してゐた。鶴永を改めて西鶴と名のつたのは、本書を出版した十月以後のことである。

誹諧 獨吟一日千句

横本一冊、薄茶色表紙の左肩に「誹諧獨吟一日千句」と記した題簽があり、内題には單に「獨吟一日千句」とのみあらはしてゐる。柱刻には書名の表示はない。丁附は四十六丁で終つてゐるが、第四十一丁に重複があつて、第四十二丁を「四十一上」と算へてゐる。だから實數は四十七丁である。卷首に「延寶三年_卯四月八日 松風軒西鶴」と署名した西鶴の自序がある。西鶴の署名と並べて名をあらはした「伊藤長右衛門道清」は、この「獨吟一日千句」の執筆を勤めた人で、かの「生玉萬句」にも執筆の一人として名を連ねてゐる。本書の板下は、即ちこの道清の筆耕するところである。第四十二丁表の板元「大阪阿波座堀 板本安兵衛」は、これまた「生玉萬句」を上梓した書肆と同一人であるが、奥附には書肆名を記した外、刊年の記載を闕いてゐる。随つて刊行の正確な年月は不明である。